

日本動物福祉協会一等賞 中学生の部

「卵に学んだ「命の授業」」

岡山県立倉敷天城中学校 一年

押木 浩太郎（おしき こうたろう）

出会った日と同じくしとしと静かに雨が降っている。三羽とも珍しく静かだ。ぐっとくる感情を抑え僕はなるべく笑顔でしようとした。車は、県鳥獣保護センターに向かっていた。

五月十三日、全ての始まり、この日は地域の川掃除だった。草が完全に刈り取られた土手で僕はカモの卵を見つけてしまった。隠れる所などどこもなくなってしまった土手で雨に濡れる卵、触れてみても温かみなどなくてすでに死んでいるようにも思えた。鳥の雛を拾ってはいけないことは知っていたが卵もダメだとはその時は思いも寄らなかった。雛は卵から出てくるのだから当然だ。しかし僕はどうしても卵を見捨てることができなかつたのだ。

発泡スチロールにヤシの繊維を敷いてこっそり巣箱を作りホットカーペットで温めた。電子温度計で温度を調節しながら三十度を保てるようになったのは三日後、母は死んだ卵を温めていると笑った。死んだ卵なら罪ではないと考え少しはホッとはした。でも、もしかしたら…という思いが捨てられず温め続けた。この期間中、卵を拾った川で親ガモらしきつがいを見つけ、とても複雑な気分になった。

七日後、卵に変化がないので一つを割ることにした。少し躊躇しながら割ると血と共に毛もくちばしもある雛が出て来た。臭いもなかったので今まで生きていたのだと分かった。信じられなかった。卵から一つの命が生まれてこようとしているのだ。

とうとうその夜遅く、卵の一つにヒビが入りピヨピヨと声が出た。僕はしばらく悦楽に浸って眺め、翌朝を楽しみに寝ることにした。翌朝、卵は昨日と違うぬくもりで僕を待っていた。雛はくちばしの先端を出し力尽きていたのだ。ほんの数時間前まで生きていたのに…。命のはかなさを知る思いだった。

残った卵からも声が出始め、事態を察した母は朝一で保護センターに電話をした。卵を移動するだけですでに法に触れること、保護センターは卵の受け入れはしていないので今回に限り孵化した雛を受け入れてくれること、今ある卵が孵化した時点で速やかに雛達を連れて来ることを言われたそうだ。

僕が学校に行っている間に母が一羽孵化させ、翌日は僕がヒビを割る手助けをして二羽目が誕生した。最初の力尽きた雛が頭をよぎり丁寧にそして必死に殻を割り外に出してやった。心臓の鼓動を掌に感じた。さらに翌日の朝、巣箱を開けると毛もほぼ乾いた雛が殻を破って出て既に歩いていた。数日間、三羽を自作の運動場に入れ、カブの葉のみじん切りとヒヨコの餌を混ぜ与えたり、水を張って泳ぎを訓練したり、親気分で一生懸命世話した。本音を言えばいつまでもこうしてたく、保護センターに連れて行きたくはなかった。

僕の考えが甘かったと気づいたのは最初の夜、一羽ずつ運動場から出して別れを惜んでいたときのこと。

最初に孵った二匹は僕に寄って来たり部屋の物に興味を示し突ついたりするのだが、最後に孵った雛だけが仲間の姿が見えなくなるとパニックになってピーピーと声をあげ走り回る。最初は弱虫な性格なのだと思うこの雛が環境の違う保護センターで生きていけるか心配していた。だが、ふと、この姿こそが野生の姿なのであって、人間や自然にない物に好奇心だけで近よって行く二羽は「警戒する力」「自衛する力」を失っておりかえって危険なのではないかと気づいた。二羽は孵化後大事をとって隔離し人間の姿ばかり見ていたが、最後の一羽はすぐに他の雛と合流させたのだ。親鳥から離し人間が育てたことによって雛の本来の力を奪ってしまった。自分のしたことがいかに重大な過ちだったか痛感し責任を感じた瞬間だった。

川辺でカモを見る度、僕は雛達を思い出さだろう。でも保護センターに向かう車の中、僕は二度と雛も卵も拾わないと心に誓った。